

お酒と薬の相互作用

薬とお酒は相性が悪い!?



アルコールと薬を

一緒に飲むとなぜ

いけないのでしょうか?



飲んだアルコールは、肝臓で分解(解毒)され、尿や汗、呼吸などに排泄されていきます。薬も、同様に肝臓で分解されるものが多いのです。つまり、同時に摂取すると肝臓の負担は大きくなってしまいます。また、分解にも時間がかかってしまい、体にとって良くないものが長時間体内に留まることにつながります。

- 結果として
- ①薬の作用が強くなり、副作用症状が現れる
 - ②薬の作用が弱くなる
 - …などといったことが起こります。

薬剤名	
糖尿病治療薬 ダオニール、アマリール、ベイスン、 インスリン製剤 など	低血糖の原因になることがある。
抗凝血薬(血液をサラサラにする薬) ワーファリン	出血しやすくなる。
抗結核薬 イスコチン、リファンピシン、 エサンブトール、ピラマイド	肝機能障害が起きる危険性が増える。
非ステロイド性消炎鎮痛薬 バファリン、ボルタレン、 ロキソニン、モービック など	胃腸障害などを悪化させることがある。
アレルギー治療薬 ポララミン、ジルテック、アレグラ、 アレロック、タリオン など	眠気やふらつきなどの作用が強くなる。
睡眠薬 ハルシオン、アモバン、マイスリー、 レンドルミン、ベンザリン など	眠気やふらつきなどの作用が強くなる。 寝る前の飲酒は控える。
抗不安薬 デパス、レキソタン、ホリゾン、 メイラックス など	眠気やふらつきなどの作用が強くなる。
抗うつ薬 アナフラニール、ルボックス、 パキシル など	眠気やふらつきなどの作用が強くなる。 病状が悪化することがある。

※右記薬剤は当院採用薬です。該当する薬剤すべてを記載することは困難な為、ご自身で飲んでいらっしゃる薬剤が該当するかどうかは薬の説明書で確認するか、かかりつけ薬局などの薬剤師にご相談下さい。

お酒との相互作用

適量を守り、過度の飲酒を避けること、そして休肝日を設けることが健康の秘訣です。もちろん、適量範囲内だからといって、お薬を飲んでいるのにもかかわらず、毎日お酒を飲むのは好ましくありません。

ちなみに： お酒の適量とは？

(成人日本人男性の場合)
※純アルコールがおおむね20〜25gをいいます。

- ビール(アルコール度 5度) 中ビン1本(500ml)
- 日本酒(アルコール度 15度) 1合
- 焼酎(アルコール度 25度) 0.6合(110ml)
- ウイスキー(アルコール度 43度) ダブル1杯(600ml)
- ワイン(アルコール度 14度) 1/4本(1800ml)
- 缶チューハイ(アルコール度 5度) 15缶(500ml)

個人差があるから：自分は強いから：などと考えずに、これを超えると、「過度の飲酒」になるということを理解していただきたいと思います。

お酒は「白薬の長」でもいわれています。薬を飲んでいての方は特に注意が必要なのです。

